

カード式公衆電話機

1982



1982年(昭和57年)

昭和57年12月から“テレホンカード”を使って通話ができる新しい公衆電話機がお目見えした。

テレホンカードを利用すれば、小銭がなくてもかけられ、長距離通話の時でも続けて硬貨を入れなくてもよい、という利点がある。

写真は、硬貨と併用であるが、昭和59年にはテレホンカード専用機も導入された。

特徴

カードを電話機に差し込むと、カードに記録されている残度数が電話機前面にデジタル表示され、通話時間に応じて減算表示される。

残度数が0になるまで繰り返し利用できる。硬貨を併用した時はテレホンカード、10円、100円の順で収納される。

デジタル公衆電話機

1990



1990年(平成2年)

平成2年3月からISDN回線を使ったデジタル公衆電話機がお目見えした。

これまでの公衆電話の機能に加え、ISDN端末やアナログ端末(ラップトップ・パソコン、ハンディターミナル等)を、この公衆電話機に接続し、データ通信や画像通信等を行うことができる。

特徴

通信機能付きパソコンやワープロを接続するだけで送受信が可能。電話機の中央にプラグの差し込み口があり、直接接続し、テレホンカードか硬貨を入れてからダイヤルする。料金はこれまでのアナログ公衆電話と同じ。

この公衆電話は、受話器を上げずにダイヤルもできる。フリーダイヤルやコレクトコール等料金先方払いならテレホンカードや硬貨を挿入する必要がない。

新形デジタル公衆電話機

1991



1991年(平成3年)

平成3年10月から、従来のデジタル公衆電話機に新たな機能を追加し、デザインも一新した。

特徴

ディスプレイが大きくなり、ボタン操作で操作案内を表示する等、ガイダンス機能が充実。番号案内(104)を利用中に、ダイヤルボタン操作により電話番号をディスプレイに表示し、リセットボタンにより表示した番号に自動発信することもできる。

カード挿入口は2個設置。受話音量調節も可能。また、デザインは丸みを持たせ、色はライトグレーを採用した。

1996



1996年(平成8年)

平成8年5月から、従来のデジタル公衆電話機に比べ、小型化するとともに変造テレホンカード対策としてカードユニットのハイセキュリティ化を図った。

特徴

大型ディスプレイを装備し、操作ガイダンスや、通話先電話番号の他にカード残度数、硬貨残枚数、通話可能時間(残り3分を切った場合)、音量レベル等を表示。

操作ボタンを9個から5個へ、カード挿入口2個から1個へ変更。ダイヤルボタンを白地に黒文字とした。

公衆電話料金	1972年		1976年		1993年		1994年	
		単位料金の改定				通話料金の改定		
市内	広域時分制の採用		加入電話と同額に		1993年10月から1994年3月まで 90秒につき10円		1994年4月から2014年3月まで 60秒につき10円	
市外			同上		1993年10月から距離別に3分間につき10円から20円に値上げ			